

津川律子・遠藤裕乃〔編〕

まちにとけこむ公認心理師

——ひろがる心理支援のかたち

日本評論社・四六判並製

2023年10月刊行

2,420円（税込）

評者＝山口剛史（NPO法人カウンセリングオフィス SARA）



ここ数十年の間に学校にスクールカウンセラーがいることや精神科にカウンセラーがいることは一般の人にも徐々に知られてきているが、本書はそういった公認心理師の多くが働いている教育や医療の領域ではなく、公的な既存のシステムの枠組みを外れて私設相談の領域で活動している11の事例が取り上げられている。その活動の形態は個人開業から法人化されたものまでさまざま、法人化の形式も社会福祉法人からNPO法人まで幅広い。支援の対象やテーマも、私設相談室、高齢者、依存症、若者、ひきこもり、子どもの学習支援、高次脳機能障害、私立学校のSC、ハラスメント、性加害／性被害、産業保健と多岐にわたる。どれも公認心理師がどのように働いているかと問われると、すぐに想像することが難しいような、大学院でのトレーニングや実習ではあまり学ばない臨床の応用の仕事だろう。本書はそれぞれの活動の紹介を形式的に行っているわけではなく、その活動の立ち上げの経緯や経営上の苦勞、そして活動を行っている人の想いや理念といったものが率直に書かれていて、同じように私設相談領域で働いている公認心理師として常日頃思っている「他の団体がどうしているのか聞いてみたい」という内容が綴られている。評者自身、NPO法人を立ち上げて今まで運営してきた体験を思い起こしながら深く拝読した。

読んでいて感じたのは次のようなことだ。異なるフィールドで、オリエンテーションも異なるにもかかわらず、既存の取り組みでは解決が難しい問題を抱える人がいて、既存の枠組みに当てはめるといより新しい枠組みをどう作るかという視点が共通している。そしてただ新しい枠組みを講じるのではなく、公認心理師としての専門性をどう取り入れるかを工夫していることが、本書の肝となっている印象も受けた。また、既存ではない取り組みを新たに立ち上げていくことは、道がないところに道を切り拓く負担や不安を伴

い、おそらく本書に書ききれないような悲痛な苦勞があったと想像するが、それぞれに理念を掲げて、目の前の苦しんでいる人に寄り添った支援を考えていくプロセスには感銘を受けた。

おそらく本書に登場する活動報告は、同じような活動を考えている人にとって参考になるものと思われるが、置かれた環境やスキルによって事情は異なるため、ただ同じことをすればうまくいくわけではないだろう。本書に取り上げられている11の活動に通じる公認心理師たちのマインドのようなものを学べたら、まちにとけこむ臨床活動を成功させられると思う。公認心理師が7万人以上存在しながらも心理職の認知が乏しい日本において、支援の狭間で苦しむ人々への活動がより広がっていくことが求められている。新しい実践を考えている人は、ぜひ本書を読んで勇気をもってほしい。